

高齢者の生活行動に対する「慣れ」や「諦め」の実態と要因に関する研究

秋田大学 学生会員 ○小島 遼太郎
秋田大学大学院 正 会 員 鈴木 雄
秋田大学大学院 正 会 員 日野 智

1. はじめに

交通施策や健康施策において、個人の行動がどのように変化するかを予測することが必要である。これらの予測に際し、性別や年齢などの観測可能な要因だけでなく、個人の選好などの非観測要因を把握することが重要である。これらの非観測要因には、本人でも自覚していないものも含まれる。例えば、生活に対する慣れや諦めがそれに当たる。自宅周辺の交通環境・買い物環境が悪化した場合、その直後は不満を抱くことが多い。しかし、時間が経つにつれその環境に慣れ、不満を感じなくなることも考えられる。特に、長い期間をその地区で過ごし、他地区との環境の比較が難しい高齢者にとってはその傾向は強いと思われる。意識調査の結果、様々なことが達成できていないに関わらず、満足と回答する高齢者が多いことも指摘されている。本研究では、高齢者の「慣れ」や「諦め」の実態の把握とその要因について分析することを目的とする。

2. 意識調査の概要

本研究では、高齢者の生活における「慣れ」や「諦め」の実態の把握のため、秋田市の 5 地区に対し平成 29 年 12 月に意識調査を行った。調査票は各地区に 300 部ずつ計 1,500 部配布し、396 票を回収している。高齢者の有無に関わらず配布を行っており、高齢世帯の割合を考慮すると多くの世帯から回収できたと考えられる。

3. 高齢者の「慣れ」「諦め」の実態把握

高齢者の「慣れ」や「諦め」の実態把握を行う。現在の生活において数多くの外出が達成できているかと、外出頻度の満足度の関係を図 1 に示す。

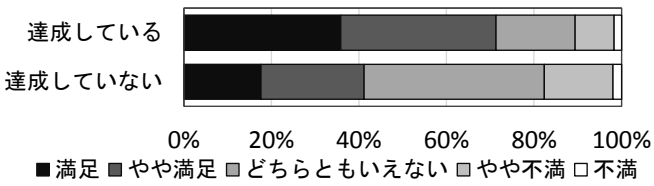


図 1 外出の達成度でみた満足度

「満足」「やや満足」の割合をみると、達成できている被験者は 71.3%、達成できていない被験者で 41.2%であった。これらのことから、達成できていないに関わらず、満足と回答する被験者の存在がわかる。

次に、これらの項目について、詳しく分析を行う。分析で用いたフローを図 2 に示す。図 2 では、「外出頻度が 65 歳の時よりも減少」かつ「その外出頻度が希望よりも少ない」にも関わらず「外出頻度に満足と回答」した被験者の割合を示している。この条件に当てはまる被験者は全体からみると 7.3%である。さらにこれらの条件に当てはまる被験者に「外出頻度の減少」について、「もうその生活になれてしまった」、「諦めている」かどうかを質問した。そのところ、72.4%が「すでに慣れてしまった」、82.8%が「諦めている」と回答している。

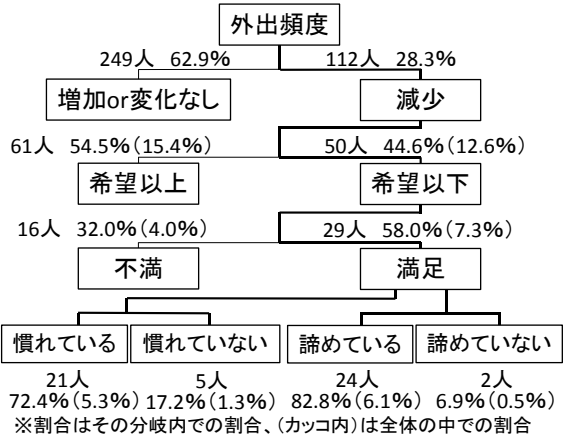


図 2 慣れや諦めの分類フロー

他の項目についてもまとめたものを表 1 に示す。各項目で慣れや諦めがある被験者の存在が確認できる。特に「外出範囲の縮小」の割合が高く、慣れや諦めが生じやすい項目と推察される。

表 1 各分類の割合

	諦めている	諦めていない	慣れた	慣れていない
外出頻度	82.8% (6.1%)	6.9% (0.5%)	72.4% (5.3%)	17.2% (1.3%)
外出範囲	90.0% (26.8%)	10.0% (3.0%)	88.2% (26.2%)	10.9% (3.2%)
利用店舗数	83.3% (5.5%)	0% (0%)	79.2% (4.8%)	12.5% (0.8%)
買い物	72.7% (4.0%)	13.6% (0.8%)	81.8% (4.5%)	4.5% (0.3%)
趣味娯楽	79.2% (4.8%)	8.3% (0.5%)	79.2% (4.8%)	12.5% (0.8%)

※割合は満足をしている人の中での割合、(カッコ内)は全体の中での割合

キーワード：高齢者、買い物、交通需要、意識調査分析

連絡先：〒010-8502 秋田市手形学園町 1-1、TEL(018)889-2359、FAX(018)889-2975

4. 高齢者の「慣れ」「諦め」の要因分析

高齢者が、普段の生活で「慣れ」や「諦め」により、外出意欲や買い物意欲が低下している可能性が示された。本研究では、普段の生活での「慣れ」や「諦め」について、19 項目の質問をしている。「慣れ」や「諦め」の要因を分析するため、これら 19 項目の回答から、因子分析を行った。因子分析は、各設問間に関連性がまったくないとは考えられないため、プロマックス法による射交回転にて行った。その結果を表 2 に示す。表 2 の「該当率」には、各項目において「当てはまる」と回答した被験者の割合を示す。「激しい運動ができなくなってきたが、それは仕方がないことだ」では 84.8%、「欲しいものを買いたい気持ちが薄れてきたが、その気持ちにも慣れた」では 81.1%が「当てはまる」と回答しており、高い割合となっている。

因子分析の結果、固有値 1.0 以上の 3 因子が抽出された。因子負荷量から判断して、「因子 1」を「活動能力低下への諦め」、「因子 2」を「活動意欲低下への慣れ」、「因子 3」を「生活スタイルへの諦め」とした。高齢者の「慣れ」や「諦め」に関しては、これら 3 因子から構成されることがわかる。

表 2 「慣れ」や「諦め」の因子

因子	設問	該当率	因子1	因子2	因子3
活動能力低下への諦め	身体機能低下への諦め	68.5%	0.67	-0.01	0.04
	交流機会減少の諦め	64.6%	0.59	0.02	0.07
	激しい運動の諦め	84.8%	0.58	-0.01	-0.10
	チャレンジすることの諦め	62.2%	0.58	0.00	0.05
	階段の上り下りの諦め	43.6%	0.55	-0.07	0.18
	新しいもの利用の諦め	70.3%	0.52	0.16	-0.06
	友人との時間減少の諦め	71.5%	0.47	0.09	0.11
活動意欲低下への慣れ	趣味の時間減少の諦め	60.7%	0.46	0.04	0.18
	生活の繰り返しへの慣れ	80.5%	0.13	0.71	-0.11
	購買意欲低下への慣れ	81.1%	0.16	0.64	-0.07
	活動意欲低下への慣れ	73.6%	0.07	0.62	0.03
	外食できないことの慣れ	55.2%	-0.20	0.50	0.35
生活スタイルへの諦め	外出手段への慣れ	62.3%	-0.06	0.47	0.13
	メリハリの減少への諦め	46.2%	0.23	-0.02	0.64
	遠出できないことの慣れ	61.9%	-0.13	0.31	0.46
	生きがい低下の諦め	52.1%	0.35	-0.01	0.46
	読み書き低下への諦め	65.5%	0.09	0.00	0.42
	外出行動低下の諦め	34.2%	0.35	-0.07	0.41
その他	交通整備への諦め	53.7%	0.25	0.07	0.13

次に、これら「慣れ」や「諦め」の構造を明らかにするために、共分散構造分析を行った。「慣れ」や「諦め」の構造化を行う際に、潜在変数を因子分析から抽出された「活動能力低下への諦め」「活動意欲低下への慣れ」「生活スタイルへの諦め」を設定した。また、これらの「慣れ」や「諦め」により、外出に対する重要度が低下するものと考え、「外出に対する重要度の認識」に関しても潜在変数として設定した。

「外出に対する重要度の認識」を説明する観測変数と

しては、「外出に対する重要度の認識」の各項目を用いた。これらの項目に対する回答を図 3 に示す。「重要」「やや重要」と回答された割合をみると、「外出で気分転換すること」が 81.1%で最も高く、「外出先への移動中に楽しいこと」では 57.8%と最も低い結果となった。

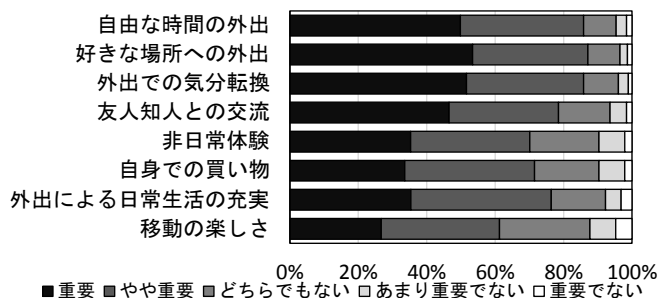


図 3 外出における重要度の認識

これらの「慣れ」や「諦め」に関する共分散構造分析の結果を図 4 に示す。矢印の数字は標準解である。GFI は 0.84 とそれほど高くはないが、設定したパスは全て有意となっており、「慣れ」や「諦め」の構造を明らかにすることができる。これらの分析から、「生活能力低下への諦め」が「活動能力低下への慣れ」や「生活スタイルへの諦め」を介して、「外出の重要度認識」につながる構造が把握できる。「外出の重要度認識」を説明する各重要度の認識の項目は、負の方向となっている。つまり、「慣れ」や「諦め」により、外出における重要度を認識しなくなる構造が示された。

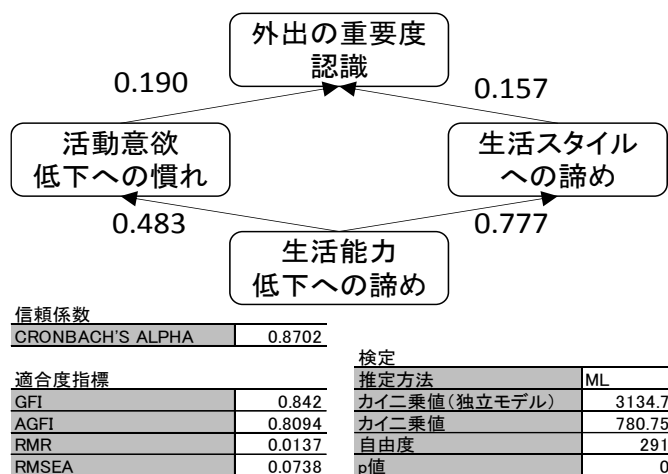


図 4 「慣れ」や「諦め」に関する構造

5. おわりに

本研究では、高齢者における「慣れ」や「諦め」の把握を行った。また、「慣れ」や「諦め」は「生活能力低下への諦め」「活動意欲への慣れ」「生活スタイルへの諦め」の三つの因子で構成されることを明らかにし、その構造についても把握した。今後は、「慣れ」や「諦め」が生じさせる属性や要因についても明らかにしたい。